

冬の菊花の詩歌

北山 円正

一

周知のように、『万葉集』には菊を取り上げた和歌が一首もなく、平安時代に入ってようやく歌に詠み始める。いっぽう『万葉集』と詠作時期が重なる『懷風藻』には、菊を詠み込んだ詩が六首ある。『懷風藻』と同時代の万葉歌人たちは菊についての知識を持っていたはずである。にもかかわらず歌に採用しなかったのは、『万葉集』と云ふ歌集の閉鎖的な偏向性⁽¹⁾や「その枠の範囲を越えまいとする性格をもつ歌の表現のため」であり、『万葉集』の歌が「中国文学的表現の利用を一般に避けたため」と言われている。⁽²⁾『懷風藻』では菊は、

對^レ峰傾[。]菊[。]酒[。]臨[。]水拍[。]桐琴[。]（境部王「秋夜宴[。]山池[。]」）
桂山余景下、菊浦落霞鮮（長屋王「於[。]宝宅[。]宴[。]新羅客[。]」）
霑[。]蘭白露未[。]催[。]臭[。]泛[。]菊[。]丹霞自有[。]芳（藤原宇合「秋日於[。]左僕射長王宅[。]宴[。]」）

などである。この時点では、菊は山中や邸宅の一景物として取り上げており、詩の主題にはまだなっていない。主要な題材としての扱いを受けるのは、平安時代の初頭に到ってからのようである。ところで、詩という外来の文学を創作するのなら、その規範に制約を受けるのはやむを得ない。秋の詩を詠じる時に、「菊」を詠み込むのは自然の成り行きである。右の引用のように、日本と同様中国文化の摂取に努めていた「新羅客」とともに詩を賦する場合、なおさら規範遵守が求められる。逆にその枠を逸脱して新たな表現を生み出すのは至難の業だったであろう。

「菊」の受容において偏りのあつた期間を経て、やがて和歌に摂取する時代がやってくる。文献におけるその先駆けは、平安朝第一代天皇の桓武天皇の詠であつた。⁽³⁾平安遷都の三年後延暦十六（七九七）年十月十一日の曲宴において、

この頃の時雨の雨に菊の花散りそしぬべきあたらその香を
（『類聚国史』巻七十五・曲宴）

と詠じている。以後『古今集』の時代を経て、菊の花は重要な題材として長く歌われることになる。

ところで右の歌は初冬十月の菊花を詠んでいる。『古今集』の菊が秋の歌に属しているのとは時季が異なる。『古今集』成立以前の歌である、

我がやどの菊の垣ほに置く霜の消えかへりても逢はむとぞ思ふ（『新撰万葉集』181・巻上）

が、冬歌に分類されているのであるから、桓武天皇の歌は必ずしも珍しくはない。ただ、すでに存在していた菊花の詩文における規範を逸脱して詠じている点には、注目するべきであろう。つまり古来中国では、菊は秋のものとするという長い伝統があったのである。奈良時代の詩でもこの決まりには忠実であった。和歌だからといって、逸れてもさし支えないと言つものではないだろう。それではこの枠組みを外れて菊の歌が詠まれるについては、どのような経緯・背景があったのだろうか。菊花の詩文との関わりや、詠作の場との関連から考えてみたい。またそれ以後冬の菊をどう詠んでいたのかも、あわせて検討することとする。

二

冬の菊を詠んだ歌は、桓武天皇以降さきに引いた『新撰万葉集』（上巻の序には「于_レ時寛平五載九月廿五日」とある）の歌まで所見がない。このあと、

秋過ぎて花盛りなる菊の花色にたぐひて秋やかへれる（3、

藤原季縄）

菊の花冬の野風に散りもせて今日までとてや霜は置くらん（6、坂上是則）

あたらしきものにざりける神無月時雨降りにし色にはあれども（9、藤原兼輔）

などと、『内裏菊合延喜十三年』に現れる。これに先立つ『寛平御時菊合』には、

けふけふと霜置きまさる冬立たば花移るふとらみに行かん（8・和泉の深日_{ふけ}の浦）

秋果てて冬はとなりになりぬとて飽かねば菊をにはひ加ふる（18）

と、冬の菊を思い浮かべる歌がある。冬の菊花を詠じる習慣を前提にしているとも言えるだろう。ただ桓武天皇の歌を引き継いでいるとは、にわかには認めがたい。延暦十六年から寛平・延喜期に到るまでにはかなりの歳月が経過している。冬の菊を詠んだ歌が生まれるには、経緯や事情があったのだろう。まず寛平・延喜期に冬の菊が歌われた背景を検討する。

寛平年間に冬の菊花を和歌に詠む前提には、平安時代の漢詩がある。奈良時代の『懷風藻』から平安初頭の勅撰漢詩集成立頃までの詩に、冬の菊を詠じたものはない。これは六朝・唐詩の状況を反映した結果である。冬の菊を取り上げた詩で最も古いのは、菅原道真の次の作である。

十月玄英至、三分歳候休。暮陰芳草歇、残色菊花周。為_二是

開時晩、当因^{オケ}発処^{ハツトコロ}稱^{ナヅケ}……（『菅家文章』巻一、「残菊詩」（十
韻、于^レ時年十六））

道真十六歳、貞観二（八六〇）年の詩である。冬十月になって他の
の芳香を放つ草は枯れたが、菊花はあちらこちらにある。これは
開花が遅いためであり、咲くところが多いためであると詠み出す。
以下花の姿をさまざまな角度から描き、「愛看寒暑急、秉^テ燭豈
春遊」冬の日がせわしく暮れるなか賞翫しよう、燭をかざして
花を見るのは春の遊びに限らないと、菊への愛着を述べて結んで
いる。明らかに冬の菊を愛でる対象としている。この頃には季節
の風物として楽しむことが習わしとなっていたようである。道真
にはこのほかに、

霜離^シ数歩^ス菊花^ハ残、更有^ニ何人^ハ比^レ目^ヲ看^ム（巻四、「冬夜有感、
簡^ニ藤司馬^ニ」）

御溝^ニ碎^レ玉寒声^ハ水、宮菊^ハ残^レ金曉^ニ色^ハ花（巻五、「冬夜呈同宿
諸侍中」）

早起呼^ニ童子^ヲ、扶^テ持^テ残^レ菊花^ヲ。日高催^ニ老僕^ヲ、掃^テ除^テ庭上^ニ沙^ヲ。
暮繞^ニ東籬^ヲ下、洗^テ私竹^ヲ傾^レ斜（同、「仮中書懷詩古調」）⁽⁴⁾

月初破却菊^ハ纔^ニ殘、漁父樵夫^ハ抑^レ意^ハ難（巻六、「对^ニ残菊^ヲ待^ニ寒
月^ニ」（于^レ時間十月十七日、陪^ニ第九皇子^ヲ詩亭））

菊枯蘭敗梅猶^ハ猶^ハ、詩興^ハ当^ニ追^ニ落葉^ヲ凝^ル（『菅家後集』、「冬日
感^ニ庭前紅葉^ヲ示^ニ秀才淳茂^ニ」）

などがある。菊を詠じた詩はかなりあり、冬の菊花もしばしば題
材となっている。このうち冬の菊を主題として取り上げているの

は、先の「残菊詩」と「对^ニ残菊^ヲ待^ニ寒月^ニ」くらいである。冬
の風物を描く中で詩中に点じられることはあるものの、それ以上
の扱いを受けるのは稀であった。この時期道真以外の詩人も冬の
菊花を詠じている。

蘭敗菊^ハ荒^ニ莫^ニ惆悵^ヲ、先侯遺^ニ託使^ヲ君看^ム（『田氏家集』巻之下、
「冬初過^ニ藤波州^ヲ、翫^ニ林池景物^ヲ」（同用「寒字」））

菅原是善の弟子であり、道真の岳父であった島田忠臣が、初冬の
庭園の景物を描いた中に荒れた菊を織り込んでゐる。ただし、こ
れは菊を中心に据えた詩ではない。

勅撰漢詩集が撰せられた弘仁・天長期には見えなかった冬の菊
花の詩が、忠臣・道真の詩には現れている。道真が十六歳で詠じ
た「残菊詩」が製作年の古いほうであり、これ以前の例はないよ
うである。しかし、最初の作ではないだろう。詩の製作は、通常
先行する詩想・表現・詩語を習得し、その上で自らの作品を生み
出すものである。規範は詩人に重くのし掛かったはずである。若
年の道真は特にそうであつたろうから、従前になかった詩材を取り入
れるとは考えにくい。現存しない先蹤となる作があつたのだらう。
師でもあつた忠臣が詠んでいたかもしれない。父是善の失われた
詩の中に含まれていた可能性はある。他の詩人も詠み込んでいた
のではあるまいか。源融の邸宅河原院の庭園を描いた次の文章な
どは、漢詩の影響をこうわっていると考えてよいであらう。

神無月のつこもりがた、菊の花つづるひさかりなるに、紅葉
のちぐさに見ゆるをり（『伊勢物語』八十一段）

まず冬になっても菊が花を咲かせる光景があったのである。ただ、すでに詩人たちが冬の菊を詠んでいなければ、このような描写は生まれにくいのではないだろうか。眼前にあるというだけでそれを描くとは限らない。詩の題材がたやすく和文に取り入れられるであろうか。『万葉集』には詠まなかった菊である。異例に属する冬の菊が先蹤のないまま行文中に現れたりはいないはずである。冬の菊を詠じた詩の存在が、『伊勢物語』の文章を書きやすかったのではあるまいか。

では九世紀後半から冬の菊を詠み込んだ詩が現れるのは、どういった背景があるからなのであろうか。まず中国文学の影響を考えてみる必要がある。六朝・盛唐頃までの詩を披見したところ、冬の菊を詠んでいる詩は検出できなかった。その後中唐白居易の『白氏文集』において、ようやく見出すことができる。「和_三錢員外早冬_四。詠_五禁中新菊_六」(巻十四・0749)がそれである。「錢員外」は錢徽。白居易の同僚であり、二人はしばしば詩の応酬をしている。この詩も、錢徽が初冬の禁中にやっと咲いた菊の花を詠んだのに対して和したものである。「早冬」は十月、この菊は遅咲きである。第一・二句には、「禁署寒氣遲、孟冬菊初_七拆_八」とある。以下花の美しさや錢徽が賞玩する様を思いやる。そして、
凄凄百卉死、歲晚氷霜積。唯有_三此花開、殷勤助_二君惜_一。
どの花も枯れてしまい、年も暮れて氷が張り霜が降りる。菊の花だけが咲いて、君の愛惜に₍₅₎応えていると詠んで結びとしている。白居易は、錢徽が詠んだ「早冬詠禁中新菊」に和している。

ただし錢徽の詩は残らない。それに白居易の詩は、禁中は寒さが遅れてやって来るので、十月になって菊がやっと開花すると、特殊な事情を述べている。おそらく菊は秋の物という規範が一般に広まっていたのであるう。逆に冬の菊は珍しいと見なされており、通常十月の菊が詩に現れることはまずなかったと言つべきである。白居易以前の詩に冬の菊花を取り入れていないのは当然だったのである。白居易には他の例はなく、以後唐詩においては、今のところ、

白菊_一為_二霜翻帶_三紫、蒼苔因_レ雨却成_レ紅(皮日休「初冬偶作、寄_二南陽潤卿_一」)

籬落_四歲_五暮、數枝聊_レ自芳(羅隱「菊」)。「歲云暮」は、一年が終わりに近づく頃を示す語であり、冬季であることを示している)

などを、晩唐詩から見出すくらいに過ぎない。平安時代の漢詩人が注目するとすれば、この晩唐期の詩ではなく、白詩である。そもそも冬の菊はきわめて特異であり、その初例と思しい白詩(錢徽の詩も含む)自体が特別な状況下に咲く花を題材にしている。この詩に道真らは敏感に反応し、自作に取り込んだのであった。あらゆる花がしおれ枯れてからも、ただ一つ寒気の中で花を咲かせている菊は、平安人を惹きつけたのであろう₍₆₎。しかし、白居易の詩がなかったとしても、人々に愛翫されていたとは思つ。

三

桓武天皇が冬の菊花を歌った延暦十六（七九七）年は、勅撰漢詩集が成立する弘仁・天長期に接する時である。この頃の詩も三漢詩集に収載されている。旺盛に六朝・初唐・盛唐時代の詩風・詩語を取り入れており、宮廷文学の華を咲かせる時期の直前に当たる。

次に平安初頭において、菊花を詩にどう詠じているかを概観しておく。まず気付くのは、詩の大半は九月九日・重陽節会の作であるということである。

旻商季序重陽節、菊為_レ開_レ花宴_二千官_一（『凌雲集』、嵯峨天皇「九月九日、於_二神泉苑_一、宴_二群臣_一」各賦_二一物_一得_二秋菊_一）

菊浦早花霜下発、荷潭寒葉水陰穿（『文華秀麗集』巻中、仲

雄王「奉_レ和_二重陽節書_一懷_二

翫_二芳菊_一、幾_二芬芳_一（『経国集』巻十三、源明「雜言九日翫_二菊

花_一篇_二心_一製_二）

相留問_二行旅_一、如何菊花開（同、良岑安世「途中九日」）

菊の花を主題にした詩賦も現れている。右の嵯峨天皇と源明の作がそれであり、嵯峨天皇には「重陽節菊花賦」（『経国集』巻一）もある。もちろん『懷風藻』の詩と同様、秋の景物として詠じる例も散見する。

今日_二三秋錫_一再臨、宿殖高松全_二古節_一、前栽細菊吐_二新心_一（『凌雲集』、藤原冬嗣「奉_レ和_二聖製宿_二旧宮_一」心_一製_二）

菊潭帯_レ露余花冷、荷浦含_レ霜旧盞残（『文華秀麗集』巻中、姫大伴氏「晚秋述_レ懷_二

滿江鴻翼足、平陸菊叢香（『経国集』巻十三、丹治比文雄「奉

試賦_二秋興_一」）

などがそれである。また、この期を代表する詩人の一人空海にも触れておく。当時の詩風を反映してであろう、『性靈集』には菊花を景物の一つとして描く詩文が六例ある。

柳葉開_二春雨_一、菊花索_二秋霜_一（巻一、「遊_二山暴_一」仙詩_二）

蘭菊未_レ吐、嚴霜萎_二苗_一（巻八、「林学生先考妣忌日、造_二佛

飯_二僧願文_一）

金風入_二簾_一、玉露泣_二菊_一（巻十、「暮秋賀_二元興僧正大徳八十

詩_一序_二）

なお宮廷の官人ではないので、重陽節会での賦詩はなく、この日の菊を取り上げた作品は見られない。

弘仁・天長期の詩賦には、冬の菊を詠じたものはない。あるいは現存しない詩にはあつたのであろうか。ただ、菊を詠む詩が多い中一例もないのであるから、当時の傾向としては、菊は秋の詩の題材であり、冬の景物として詠じるものではないという認識があつたと考えてよい。秋の詩の主要な題材である菊を詠み込んでいたのであるから、桓武天皇の延暦十六年十月における菊花の歌は特異と言える。当時の詩風の状況を踏まえない歌はなぜ生まれたのであろうか。和歌を作る側からの、何らかの理由があつたのかも知れない。作歌の背景を検討する必要がある。

四

桓武天皇の和歌を再度引用して、詩における菊花の表現のあり方とどう関わっているのかを検討しておく。

この頃の時雨の雨に菊の花散りそしぬべきあたらしその香を歌には、雨に打たれる菊花とその香を惜しむ心情を詠んでいる。雨中の菊は、

雨荒深院菊。霜倒半池蓮（盛唐杜甫「宿賛公房」）
雨句紫菊叢叢色。風弄紅蕉葉葉聲（『千載佳句』上・暮秋、杜荀鶴「秋思」）

鸞知社曰「辭巢去。菊為重陽冒雨開（同・重陽、李端、或云皇甫冉「秋日東郊作」、和漢朗詠集』卷上・九日）」と、唐詩に見える。また、菊花の香りについては、

蘭有秀兮菊有芳。携佳人兮不能忘（『文選』卷四十五、漢武帝「秋風辭」）

肇三春而懷芳。陵九秋以愈護（『藝文類聚』卷八十一・菊、齊卞伯玉「菊賦」）

擢秀三秋晚。開芳十步中……碎影涵流動。浮香隔岸通（初唐駱賓王「秋晨同淄川毛司馬秋九詠」ノ「秋菊」）
可歎東籬菊。……雖言異蘭蕙。亦自有芳菲（盛唐李白「感遇四首」ノ二）

などと、古来継続して詠じている。さらに日本においても、水底遊鱗戲、巖前菊氣芳（『懷風藻』、田中淨足「晚秋於長

王宅宴」）

把盈玉手。流香遠。摘入金杯。并色難（『凌雲集』、嵯峨天皇「九月九日、於神泉苑、宴群臣。各賦一物、得秋菊」）

蘭幸佩以擢秀。菊憶杯而含馨（『經國集』卷一、菅原清公「重陽節神泉苑、賦秋可哀。応制」）

のように、奈良時代から見える。ただ、菊の香を惜しむ詩文はないようである。これを除けば、桓武天皇の和歌に盛り込まれた内容は、それまでの菊の詩のそれと変わらない。特異な詠みぶりなのではない。詩文における菊の表現にのつとつた和歌と言つてよい。従前の表現を学んだ結果が現れているのである。

この和歌を詠じた延暦十六年十月十一日の宴を、『類聚国史』（卷七十五・曲宴）は、

曲宴。酒酣皇帝歌曰、この頃の時雨の雨に……。賜五位已上衣被。

と概略を記すのみである。開催の場所がどこで、宴がどのような内容であったのか、「曲宴」で菊の花がどういう役割を果たしていたのかは、記載がなく不明である。歌の中身からすれば、名残の菊を賞翫する宴であった可能性はあるが、断定はできない。宴が酣になって、その雰囲気の中で天皇が詠出したのであった。これだけでは冬の菊花を詠んだ背景は分からない。

延暦十六年十月の時点で、桓武天皇が冬の菊花を歌に詠むという新奇な試みをなし得たのは、それまでに漢詩文学習があつたか

らにほかならない。しかし、それだけでは秋の菊は詠めても、冬の菊については難しいだろう。そうすると、まず愛でるべき菊花が眼前にあったことが作歌の前提だったはずである。初冬十月ではあるが、菊は寒気を凌いで花を咲かせ、芳香を放っていた。現実の景物である菊花を歌に詠もうとするなら、秋の花として詠じるといふ詩文における規範は棚上げするほかないはずである。

もつとも酔いのままに興に乗じて詠じるとなれば、規範からは逸脱しやすい。ただ時季が外れていても、表現に当たってはすでに学んでいた菊花の詩想・技法を用いることになる。この背景には、菊花の詩文製作を想定しておく必要があるだろう。中国の詩文を鑑賞しているだけでは、いきなり和歌に応用するのは困難かと思われる。そうでなければ、「曲宴」という小規模な催しとは言え、また酔いに任せたとしても、元来秋のものと認識している題材を持ち込むのは違和感があるだろう。ただ、菊花の詩文についての知識や創作の経験をもつ参加者なら、この歌を受け入れることができる。『懷風藻』以降も、菊花を詩に詠じていたという背景を想定してよいのではあるまいか。どのような人々がこの「曲宴」に召されたのかは不明であるが、詩文の知識や創作の経験を持つ文人たちを含んでいたと考えてよいであろう。こういった詠作の前提を想定してよいのではあるまいか。

その時の宴は、『類聚国史』には言及がないことからすると、賦詩を行わなかったのであろう。なおも咲き誇る冬の菊を愛でる酒宴であったと見てよいかもしれない。酒杯が巡って宴が酣と

なった中、気分を良くした天皇が、菊の花を歌に詠むという挙に出た、という次第なのではあるまいか。詩歌いずれの規範からも外れた冬の菊花が詠じられて、参加者は驚いたことであろう。飛躍とも受け取ったであろう。天皇の詠歌が意外な内容であったために、宴を記録にとどめたのではあるまいか。特筆するべき出来事だったのである。しかし、理解を超える奇矯な歌ではなかったはずである。秋の菊花の詩に用いる表現が盛り込まれていたからである。『藝文類聚』『初学記』などの類書や六朝・唐の詩から学んだ菊花の表現を応用していることは明らかなのである。参加者は、酔いに乗じた桓武天皇が想定外の対象を詠み上げて、虚を衝かれた思いだったであろう。

五

桓武天皇が詠じてから、冬の菊を賞玩する催しは長く見られない。延暦十六年の曲宴が菊を愛でるために開かれたのかどうかは定かではなく、冬菊の宴はもつと時代が下ってから始まったとも考え得る。以後の公私にわたる宴を一瞥しておく。

初冬の菊を愛でる集いの、史料における初見は、『日本紀略』寛平六（八九四）年十月十八日の条の、

皇太子殖^二霜菊於丹墀^一、奉^レ覽^二天皇^一。其日、公宴。賦^二冬日残菊^一。

である。皇太子敦仁親王（後の醍醐天皇）が菊を植えて、宇多天皇に披露している。そして、「冬日残菊」の題で詩を賦している。

それは「公宴」と言われており、天皇・東宮の御前での作文である。当時貴族社会では冬の菊を賞美していたであろうし、すでに詩人たちはそれを詠じていたのだらう。残念ながらこの日の詩は残っておらず、中身は知りえない。先に引いた道真の詩のように、衰え行く菊への愛惜を中心に詠んだのであろうか。花のない季節に独り咲く姿や、花の色の移ろいを取り上げているのかもしれない。いずれにしても公の場での詠作は、冬の菊花が詩の主要な題材として認知される契機となったことであろう。この時、菅原道真は東宮亮として敦仁親王に近侍している。すでに冬の菊を詠じてその風趣を会得していた道真から、この日の催しを持ちかけたのかもしれない。東宮が道真の詩に触発された可能性もあるう。さらに昌泰元（八九八）年閏十月十七日に、「第九親王」の詩亭において詩宴があり、「对残菊待寒月」（『菅家文草』巻六）が題であった。この時の紀長谷雄の詩序によれば、道真が親王の詩才を「如吾輩者、殆不可及」と称え、「須他日相尋、以爲吾道之宗」（『本朝文粹』巻十一）と呼び掛けて実現したものである。冬の菊花賞玩の集いを、道真を中心とした詩人らが持つのは注意してよい。

その後、延喜九（九〇九）年十月四日には、「内裏有菊花宴」（『貞信公記抄』）とある。この年の重陽の宴は、「依雨」って停止している（『日本紀略』）。これに伴う代替措置であらう。同十三年十月十五日には、「太上法皇、於亭子院、召王卿文士等、令賦菊潭水自香詩。伶人奏楽」（『日本紀略』）と、宇多法皇

が冬の菊を賦する詩宴を催している。同十七年閏十月五日には、「菊宴」があり、

左衛門督藤原朝臣、献御挿頭、便献倭歌。御和之後、藤原朝臣、下殿拝舞。次読侍臣所献和歌。（『新儀式』巻四・臨時上・花宴事。「藤原朝臣」は、定方）

と和歌を詠じている。翌十八年には次のような催しがあった。

同じ年十月九日、更衣たち菊の宴したまふ。その提の台の洲浜の銘の歌、女水のほとりにありて菊の花を見る菊の花惜しむ心は水底の影さへ色は深くぞありける（『躬恒集』191）

更衣らの冬の菊を愛でる宴である。洲浜には菊とそれを見る女性の人形を配し、躬恒の和歌を書き付けている。宮廷での女性の催しとして注目できよう。和歌の興を伴ったかも知れない。賞玩の裾野が広がっていく様相が窺える。延喜年間からは内裏での菊合が時々行われる。

内裏菊合延喜十三年（九一三年十月十三日）

醍醐御時菊合（延喜二十一年十月）

内裏菊合天曆七年（九五三年十月二十八日）

延長八（九三〇）年九月二十九日に醍醐天皇が崩御して、翌年から重陽宴は停廃となる。この事態への代替措置として、十月の初めに残菊の宴を開くことになる。開始を告げる詔勅（天曆四（九五〇）年九月二十六日、『本朝文粹』巻二、大江朝綱「停九日宴十月行詔」）には、「凡厥儀式、一准重陽」とあり、その内

容・格式は節会に等しい。その後安和元（九六八）年に重陽宴が復活するまで続く（『日本紀略』）。

宮廷外でも冬の菊に因む集いがあった。洛外深草の地にあった藤原北家の私寺極楽寺での菊会がそれである。「参向極楽寺」有下供「菊花音楽事」上（『貞信公記抄』延喜十二年十月十九日）と、菊花と音楽を供える法会であった。延喜七年には行われていたこの法会は、天徳三（九五九）年までの実施が確認でき（『九曆』）、十月の恒例行事であった。「極楽寺供」菊、無「音楽」依「先閣」遣教、彼御子孫可_レ行故也。供蓮花_二時_一、与_二春宮大夫中納言_一相定了」（『貞信公記抄』延長二年十月十六日）と、藤原時平の意向が働いていた。記録の初見である延喜七年は、その創始からあまり隔たっていない頃なのではあるまいか。さらに『九曆』天曆三年十月二十五日の条には、「家初行_二菊会_一事」とある。貴族が自家で催す冬の菊にちなむ集いは、これまで試みられていなかったらしい。中身は、極楽寺の「菊会」と変わりはないのであるうかがう。ともに詩歌に関する記録はないが、冬の菊花を愛でる習慣はいつそのの広がりを見せたと言える。

十月の残菊宴は、重陽節会での菊の花賞美に対する、冬の菊を愛でる催しであった。重陽節会停廃の代替行事としての役割を担っていた。冬の菊は、秋の菊に劣らない詩情を与えていたのである。加えて貴族らも法会や菊会を行っていた。十世紀中ごろまでの冬の菊を賞翫する催しを取り上げて来て、その公私における深まりが明らかになったと思う。このように中国にはない独自の

催しが定着していた。以後平安時代を通して冬の菊花を賞玩し、詩歌を生み出して行くことになる。

六

冬の菊花を和歌に詠むことが桓武天皇から始まるのか、それ以前に例があるのかは明らかではないが、その頃から詠み出したと見ておいてよいかもしれない。ただこの新奇な試みは直ちには受け継がれてはおらず、しばらく詩にも和歌にも取り入れられなかったようである。新鮮ではあったろうが、たやすく受け入れられるような趣向ではなかったらしい。その後同じ題材を扱う和歌は、今に伝わる資料の中では、およそ百年後に成立した『新撰万葉集』（81・巻上・冬歌）の、

我がやどの菊の垣ほに置く霜の消えかへりても逢はむとぞ思ふ

まで見出せない。これ以後冬の菊花が詩歌にどう詠まれているのかを検討しておきたい。

右の歌は、菊の上に置く霜が消えるように我が命が消えてもあなたに逢いたいと、切ない思いを描いている。「置く霜の」までの序に菊花に降りた霜を詠み込んでいるが、一首の主題は下句の恋情である。『古今集』では同歌を、「我がやどの菊の垣根に置く霜の消えかへりてぞ恋しかりける」（564・紀友則）として、「恋歌」に収載している。「霜」が見えるとは言え、詩文の例からすると秋歌に分類しても支障はない。また恋歌に属していてもおかしく

はない。つまりこの歌は、「冬歌」に分類されているから冬の歌になっているのである。『新撰万葉集』所載のこの歌には、次の漢詩が付けられている。⁽¹²⁾

青女触来菊上霜 青女触れ来る 菊の上の霜、

寒風寒気蕊芬芳 寒風寒気 蕊芬芳たり。

王弘趁到提樽酒 王弘趁ね到りて 樽酒を提げ、

終日遊邀陶氏莊 終日遊邀す 陶氏が莊。

第一句の「青女」は、霜を司る女神。この句が、歌の上句の内容にほぼ重なる。第二句にかけて、「霜」「寒風寒気」があるなど、冬の寒さを感じさせる情景を描き出している。これに対して第三・四句は、九月九日に酒なく、菊の花の傍らに座っていた陶潜のもとへ、王弘から酒が送られて飲んだという故事（『藝文類聚』『初学記』の「九月九日」）を踏まえている。冬の菊花を題材とする和歌を承けた詩は、秋の菊花にまつわる故事を取り込んでいるのである。第一句の「青女」にしても、重陽やその日の菊花とともに詠じることがあり、冬にのみ用いる語ではない。『淮南子』（天文訓）に「至秋三月……青女乃出、以降霜雪」とあるように、晩秋に現れて霜を降らせる神なのである。そうなると第二句の「寒風寒気」も、一首の描く季節からすると、一概に冬の寒さを表現した語とは言えなくなる。つまり、歌に付せられた漢詩は、晩秋の景物と九月九日の故事をその内容としているのである。『新撰万葉集』の詩は、もともになった和歌の内容に添う形で詠じている。この詩の場合、歌の恋情については顧みず、菊に置く

霜と菊にまつわる故事を詠み込んでいる。しかも晩秋の内容になつており、冬の詩とは言いがたい。なぜこのように季節が異なるのかと言えば、詩人が参照した六朝・唐の詩には冬の菊を題材とした作がまず見られず、それにまつわる故事・逸話や伝承等もなかったからである。『新撰万葉集』の漢詩作者が「我がやどの菊の垣ほに……」の歌に詩を付けようとした時、ふさわしい表現・語彙や典故がなかったために、秋の菊を取り入れた詩文を用いるしかなかったのである。漢詩製作に当たっては、旧来の詩文等を利用することが必要となる。冬の菊花のような新たな主題や情趣と対峙した時、いかに詠じるかは、詩人にとって大きな問題であったろう。先蹤がなければ作り出すしかないのだが、ここでは秋の菊に関連した詩文を取り込む方法を選んだのである。

冬の菊を主題とした菅原道真の詩が二首ある。先に引いた、

「残菊詩」（巻一）

「对残菊待寒月」（巻六）

が、それである。ともに「残菊」と呼ばれている。⁽¹³⁾ 前者の描く菊は、「残色菊花周し」（第四句）衰残の色彩に覆われ、「紅に染まりて衰葉病み、紫を辞して老茎惆ふ」（第七・八句）葉も茎もすがれてその色は褪せて行き、「露洗ひて香尽くこと難く、霜濃やかにして艶尚ほ幽かなり」（第九・十句）露に洗われ霜が降りても花の香と色は留まり、「低れては砌脚に憑るに迷ひ、倒れては欄頭に映ゆるを悪む」（第十一・十二句）花が垂れ倒れては心を乱すのであった。今まさに枯れ果てようとする時であるからこ

そ「愛で看る寒暑急なるとき、燭を乗ること豈春遊のみならむや」
(第十九・二十句) 冬の日がせわしなく暮れる時であつても、賞玩するのであつた。冬になつてからもなお色と香をとどめながらも、間もなく命脈の尽きようとする凋残の姿を愛惜する詩である。

後者の詩は、残菊に相對して月の出を待つ折りの、わき上がる感懷を詠じている。「月初めて破却して菊纔かに残る、漁父樵夫も意を抑ふること難からむ」(第一・二句) 欠落に向かう月と衰亡をひかえた菊を目の前にして、あわれを抑えがたいという。「況むや復た詩人の俗物にあらざるをや、夜深け年暮れて泣くなく相看る」(第三・四句) とりわけ詩人は損ない衰える景物に心を動かされ、泣きながら見入つてしまふのであつた。道真の詩人としての意識と詩情の在処とがよく現れた力編である。

道真が二首の残菊の詩に描いた情趣、衰残の姿への愛惜は、桓武天皇の「あたらしの香を」と初冬の雨に消えようとする菊の香りを惜しむ風情を、一歩進めたと見えよう。道真は菊花の「残」を詠じて余すところがない。

その後も冬の菊花は詩に詠じられている。公私にわたる賦詩の集いが頻繁に催されたことからすると、かなりの数量であつたと思われる。さきに言及した残菊の宴における作文がその一つであつた。その開始を告げる村上天皇の詔勅からは、「宜_下開_下良識於十月之首、以_中翫_中余芳於五美之叢_上」(『本朝文粹』卷二、大江朝綱「停_下九日宴_上十月行詔_上」)と、秋を過ぎて残っている花を愛でようとする姿勢が窺える。「五美」とは、菊の持つ特性・美点、

「准_上天極_上」「后土色_上」「君子德_上」「象_上勁直_上」「神仙食_上」(『藝文類聚』卷八十一・菊、魏の鍾会「菊花賦」)を言う。詩文においては、寒気の中独り咲く姿を「君子德」「勁直」と描くことが多い。この宴でも菊花のこの美德を主に詠み込んでいたのであろう。

平安中期にも詩会で詠じられている。大江匡衡の「江吏部集」(巻下)に「潔如_上君子立_上庭沙_上……抱_上紫未_上曾忘_上勁節_上……松柏後凋相等輩……風姿無_上撓_上」余香遠、霜刃雖_上侵晚艶_上奢_上」(「初冬同賦_上殘菊_上」)は、冬の寒さに負けない強さを示し、香を漂わせて花の色は美しいと描いている。また、「為思殘菊有_上貞心_上」(「初冬同賦_上待_上月思_上殘菊_上」)も、変わらない花の美しさに貞節を見出している。

平安後期になると、「至_上于勁節迎_上冬兮難_上變_上、雜蕊帶_上霜兮初衰_上、就_上疎籬_上以酣暢焉、地迷_上醉郷國之境……」(『本朝統文粹』卷十、藤原有信「冬日陪_上内相府書閣_上、同賦_上酌_上酒對_上殘菊_上」)「應_上教詩_上」序。「内相府」は藤原師通)と、冬になつて衰えを見せ始めた菊を賞玩しつつ酒を飲む宴があつた。時に寛治元(一〇八七)年十一月二日。その詩は、『中右記部類』卷七紙背漢詩にあり、十七首を数える。その中の大江匡房詠には、「菊殘常被_上曉霜侵_上、酌_上酒對_上時自有_上心_上……紫分_上余艷_上玉類地_上、紅借_上衰顏_上離碎陰_上秋後唯憐_上花最深_上……」と、菊の衰貌が賞玩の対象となり、感慨を催す。匡房には、「賦_上殘菊_上」(『本朝無題詩』卷二)という長編の詩がある。「嚴冬初到_上尽_上群草_上、老菊尚殘_上抽_上衆芳_上……孤叢後_上尽同_上松柏_上……衰華繁萼_上還奇絶_上、貞節勁心無_上比方_上……輕軒細

馬当凝思、墨客文人足断腸、嚴冬の中なおひとり残っている。「衰華繁萼」はすばらしく、「貞節勁心」は比べるものがない。「凝思」「断腸」は残菊の姿を見て起こる感慨である。

右の「君子徳」「勁直」を中心に詠じることが、冬の菊花の詩の際だった特徴かというところではない。これらは、

無絶終古、惟蘭与菊（『文選』卷五十九、沈休文「齊故安陸昭王碑文」。五臣注「蘭菊皆草名也。喻人徳如此物之香不絶、至于終古也」）

歎揺落於三秋、偉貞芳於十歩（楊炯「庭菊賦」）

懷貞不披清霜、快復還蒙白日臨（田氏家集「卷之上」）

「侍中局賦」秋陽曝菊花」

謙徳晚開秋月抄、勁心寒立曉霜前（『菅家文章』卷六、「重陽

侍宴同賦」菊有五美、各分二字、心製」詩序）

などのように、これまで、秋の菊を描く詩文に用いてきた表現である。新たに生み出したものではない。この点は、さきに取り上げた桓武天皇の歌や『新撰万葉集』の場合と同じであり、それまで親しんできた菊花の詩の表現を踏襲したのである。季節を示していなければ、秋の詩とも映る。詩人たちには、冬の菊独特の表現や詩情を作り出す努力がなかったと言えなくもない。または作り出そうとしても、それは容易ではなかったであろうか。わずかな例を取り上げたただだが、平安後期の詩文は、道真が描いた詩情の一端は引き継いでいると言えよう。

和歌における冬の菊花は、延喜年間以降、

散りはてて花なき時の花なればうつろふ色の惜しくもあるかな（『内裏菊合延喜十三年』1、藤原興風）

ももしきに惜しみとめたる菊の花いくたび置かむ霜にうつら（『醍醐御時菊合』11、大江千古）

などのように、花の色の移ろいを愛で、残る花を惜しむ心情を描くところに主眼がある。この詠みぶりは平安時代を通じて変わらない。漢詩の表現と比べておく。

はじめの冬 十月

草枯れの冬まで見よと露じものおきて残せる白菊の花（『好忠集』283）

十月

秋はてて冬にうつろふ菊の花かくしも枯れぬものとやは見し（『大式高遠集』365）

十月ばかり、人の家に菊を見て

ほかなるは枯れ果てにしを惜しみおける菊に心の見えもするかな（『道濟集』17）

菊

むらさきの色のみならず菊の花冬にさへこそうつろひにけれ（『重家集』404、「小輔歌合すとてこひしかば」）

冬になっても枯れずに花を咲かせている姿を描くことが多いのだが、詩文にしばしば描く「君子徳」「勁直」などの美質を見出そうとはしない。また詩における衰残の姿を描くことがまずなく、それを見てわき上がる感懐を表現しようとはしていない。中国の

詩文における、菊花の霜や寒気に負けない強さや貞潔・君子の徳などの際だった特徴は、我が国の漢詩文に取り入れられても、和歌における受容は困難だったのである。

菊の和歌は、すでに『古今集』（秋下）に、

秋をおきて時こそありけれ菊の花うつるふからに色のまされば（279・平貞文）

と、花の色の変化を賞玩し、また、

にほひけんさかりは見ねど菊の花名残惜しくも思ほゆるかな

（『古今和歌六帖』3764・菊）

もみぢのみ惜しくはあらず菊の花

左衛門尉

しぐれの先に折りてかざさん

躬恒（『躬恒集』344・

聯歌）

と、残る花への哀惜を歌っている。この詠風は以後受け継がれ、冬の菊にも応用している。⁽¹⁴⁾歌人たちは、残菊とは呼ぶものの、新しい表現を創作しようとはせず、旧来の詠み方を踏襲していたのである。漢詩文の場合と状況は変わらない。季節が冬に移っても菊には変わりはないという意識が根底にあったのであろうか。

平安時代に入って、菊は秋の花という文学における規範を乗り越え、冬の花として詩歌に詠むようになった。この新たな動向の背後には菊花を賞玩する心がある。高兵兵氏は、中国では、

「残菊」は、「遅くまで咲き残る菊」でも「傷んだ菊」でもなく、主に重陽というもつとも人に觀賞される時期を過ぎて、觀賞価値が無くなった菊として登場し、マイナスのイメージ

を持ち、あまり主題に取り上げられることもなかったのである。

というとらえ方であるのに対して、日本では残菊は、「時間とともに移ろうからこそ大いに賞美されていたのである」と述べておられる。⁽¹⁵⁾桓武天皇以来の菊花詠には、このような賞美の態度があると見てよい。この賞翫のあり方は、秋と冬の間に隔てを設けることなく続いていたのである。桓武天皇が冬の菊花を詠み得た背後には、日本独特の觀賞姿勢があったと言える。以後この姿勢は変わることなく受け継がれて行くのである。

〔注〕

（1）小島憲之『国風暗黒時代の文学』上 三九九―四〇五ページ。

（2）『続古今集』（1881・賀）に、「九月ばかり菊花を、聖武天皇御歌」として、「ももしきにうつるひわたる菊の花にほひぞまさる万代の秋」とある。これについて本居宣長は「奈良宮のころ、菊をよめる例なし、よしそれは有もしてむ、此歌はさらにそのかみのふりにあらず、いたく後のさま也」（『玉勝間』四の巻）と、詠みぶりが後代のものであると指摘している。首肯しうる見解であり、奈良時代における菊花の和歌の例とは見なせない。

（3）道真は後に、「少年愛」菊老逾加、公館堂前数畝斜」（巻四、「官舎前播」菊苗」。讃岐守時代の作）と、若いころ

から菊を愛好していたと述懐している。「仮中書」懷詩（巻五）にも菊への気づかいがよく現れている。

- (4) この詩には冬季であることを明示する語がないが、詩の前後が「冬夜呈同宿諸侍中」と「霜夜対月」なので、いつ頃の作であるかが分かる。

- (5) 元稹「菊花」（『千載佳句』下・菊、『和漢朗詠集』巻上・菊）の「不是花中偏愛菊、此花開後更無花」と言うところは同じ。

- (6) 拙稿「菊花の詩文と和歌——「独」「我ひとり」をめぐる——」（『神戸女子大学文学部紀要』第二十六巻）参照。

- (7) 平安時代における菊花の詩文の表現については、本間洋一「菊の賦詩歌の成立——菊花詠の小文学史——」（『菅原道真の菊の詩』（『王朝漢文学表現論考』所収）参照。

- (8) 桓武天皇は宴席において、しばしば「酒酣」酔いのままに歌を詠じている。

曲「宴□庭」酒酣、上乃歌曰（『類聚国史』巻三十二・天皇遊宴・延暦十五（七九五）年四月五日）

酒酣、上喚葛野麿於御床下「賜酒。天皇歌云（『日本紀略』延暦二十二年三月二十九日）

- (9) 諸説あるが、後藤昭雄氏が、「漢文学史上の親王」（『平安朝漢文学論考』所収）において比定された、清和天皇の皇子貞真親王がよいのではあるまいか。

- (10) すでに挙げた、寛平六年の皇太子敦仁親王（醍醐天皇）・

昌泰元年の第九親王が催した冬の菊花賞美が先蹤となる。時平はこの影響を蒙ったのであろうか。

- (11) 冬の菊歌についての論考には、徳植俊之「菊歌攷——冬の菊歌をめぐる——」（『和歌文学研究』第六十一号）がある。

- (12) この詩の注釈については、新撰万葉集研究会編『新撰万葉集注釈』巻上（『補篇』参照）。

- (13) 「残菊」については、小島憲之「漢語享受の一面——嵯峨御製を中心として——」（『国風暗黒時代の文学』補篇）所収、菅野禮行「道真の残菊詩の独自性」（『平安初期における比較文学的研究』所収）、高兵兵「菅原道真詩文における「残菊」をめぐる——日中比較の視角から——」（『日本研究』第三十二集）など参照。

- (14) 右の和歌と連歌は、「心秋の菊を哀惜する例と考えたが、季節を明示しておらず、冬の歌の可能性はある。そうなる」と十世紀半ば頃までの同種の歌は、ほとんどが冬の歌であるのかもしれない。今後明らかにしておく必要があるだろう。

- (15) 注（13）高氏の論考参照。